
発達理論の学び舎

Back Number: Vol 259

Website: 「[発達理論の学び舎](#)」



目次

- 5161. 【ヴェネチア旅行記】Aspireラウンジでくつろぎながら
- 5162. 【ヴェネチア旅行記】ヴェネチアに到着して～満月の映える運河を眺めながら
- 5163. 【ヴェネチア旅行記】天空からの時空を超えた贈り物
- 5164. 【ヴェネチア旅行記】自由になりたかったハエ～彼が伝えたかったこと
- 5165. 【ヴェネチア旅行記】いつもと変わらない食生活
- 5166. 【ヴェネチア旅行記】機内から見たアルプス山脈の絶景を思い出して
- 5167. 【ヴェネチア旅行記】永遠に受け継がれる旅～ヴェネチアという街が優しく語りかけて
来てくれたもの
- 5168. 【ヴェネチア旅行記】本日の計画
- 5169. 【ヴェネチア旅行記】小松美羽さんの作品を鑑賞しにサン・マルコ広場に行ってみたところ・・・驚きの光景が広がっていたヴェネチア
- 5170. 【ヴェネチア旅行記】I Musici Venezianiのコンサートに参加して～ヴィヴァルディの四季より
- 5171. 【ヴェネチア旅行記】ヴェネチア滞在3日目の計画
- 5172. 【ヴェネチア旅行記】今朝方の夢
- 5173. 【ヴェネチア旅行記】イタリアのピザのなんたる美味さよ～自分の中の食いしん坊
- 5174. 【ヴェネチア旅行記】親切心のバトン
- 5175. 【ヴェネチア旅行記】おっちょこちよいな私と親切心が仇になる私
- 5176. 【ヴェネチア旅行記】自由の刑から解放されつつある自己：新たな感覚の芽生え
- 5177. 【ヴェネチア旅行記】サン・マルコ広場のギャラリーで小松美羽さんの作品を見れた幸運～企画展“Diversity for Peace!”より
- 5178. 【ヴェネチア旅行記】幻想的な音による目覚めとヴェネチア滞在4日目の過ごし方
- 5179. 【ヴェネチア旅行記】イタリアのオーガニック食品事情：「産みの苦しみ」を示唆する今朝方の夢
- 5180. 【ヴェネチア旅行記】ヴェネチアの街から滲み出るもの：ペギー・グッゲンハイム・コレクションを訪れて

今、スキポール空港のAspireラウンジにいて、フライトを待っている。昼食にラウンジのサラダとスープをいただき、エスプレッソを片手に、先ほど一曲ほど曲を作った。スキポール空港に向かう列車の中では二曲ほど作り、ラウンジでは一曲作った。ここでもう一曲作ろうと思ったが、ボーディングの時間を考えると、ここで曲作りをやめ、続きはヴェネチアのホテルに到着してからにしたい。

宮殿を建て替えて作られたホテルで滞在する予定の部屋は、幸いにも運河を眺めることができるようだ。以前の日記で書き留めたように、この宿泊先はホテルと言うよりも宮殿の一つの部屋のようにあり、台所が付いており、バスルーム、リビングルーム、ベッドルームなどが分かれている。一人で泊まるには広すぎるスペースだが、宿泊費はそれほどでもなく、せっかくなので今回の旅行ではそうした場所に宿泊することにした。

今日スキポール空港に到着して気づいたのは、およそ1ヶ月前に日本に一時帰国した時からリノベーションがあったようであり、セキュリティーチェックの場所が変更になっていた。以前よりも少しばかりセキュリティーチェックの場所が遠くなった感じだ。とはいえ、セキュリティーは速やかに流れており、全く待つことなくセキュリティーを抜けた。セキュリティーを抜けてからは見慣れた景色が広がっており、そこはレストランや土産屋があるいつもの空港のままだった。そこからラウンジに向かい、今に至る。

ふと気づいたが、いつもプライオリティー・パスを使ってこのラウンジを使っているのだが、ひよっとしたら、スキポール空港にはこのカードを使って活用できるラウンジが他にもあるかもしれない。欧州国内の旅行でビジネスクラスに乗ることはないが、日本に一時帰国する際などにKLMのビジネスクラスを利用すると、KLMのラウンジを使うことができ、そこは今使っているラウンジよりも食事が充実している印象だ。

そもそもラウンジは、コーヒーを飲みながら日記の執筆や作曲実践をするために利用させてもらっているのだから、食事をするためにラウンジに来ているわけではない。今使っているAspireラウンジは、ワーキングスペースもあり、個室のようなテーブル席があり、自分の取り組みに集中できる。今もこうして個室のようなテーブル席でこの日記を書いている。とはいえ、食事を当てにする人にとっては、

このラウンジは少々物足りなさを感じるかもしれない。リンゴ、バナナ、オレンジなどの果物類は置かれているが、サラダに関してはもう少し充実させていいかもしれないと勝手ながら思う。食事と比較するならば、JALのエコノミークラスでも活用できる成田空港のサクララウンジの方が食事は遙かに充実しているだろう。そのようなことを少し考えていた。

また時間を見つけて、Aspireラウンジ以外にプライオリティーパスで活用できるラウンジがスキポール空港内にはないかを調べておきたい。年末にもう一度欧州内の旅行を考えているため、その時にそのラウンジを試してみるのもいいだろう。

後もう少ししたらボーディングが始まる。スキポール空港からマルコ・ポーロ空港までは1時間45分ほどの短いフライトであり、空港からホテルまでも比較的近くて助かる。空港から停車駅なしの35番のバスに乗り、そこから400mのところにある場所に今日からお世話になる。ヴェネチアの街でいかなる出会いがあるのか今から楽しみだ。Aspireラウンジ@スキポール空港:2019/11/9(土)14:44

5162.【ヴェネチア旅行記】ヴェネチアに到着して～満月の映える運河を眺めながら

ヴェネチアの運河に映える満月の影。それは水面を穏やかに揺らめいており、それを見る者を魅了している。

ついにヴェネチアに到着した。この街に着いてみて、何をどこから書いていいのか本当に迷ってしまう。流れ出てくる言葉に純粹になり、筆の走るままに今の感情や感覚を書き留めておきたい。今この瞬間、私は宿泊先の宮殿にいる。それは本当に宮殿と表現してもいい。

玄関に到着して一歩中に入った時、正直なところ面食らってしまった。その建物の歴史と美しさに感動してしまったのである。今もまだその感動の中にいるため、あまり客観的な表現ができないかもしれない。これは一晩寝て、この感動を冷ますべきか。それとも感動のまま筆を走らせるべきか。

いずれにせよ、ここは本当に1400年代に建築された小さな宮殿であり—誰の所有物か後ほど調べておく。オフィシャルサイトがあるらしく、[こちら](#)には79枚ほどの紹介写真がある—、出迎えてくれたポーターの男性にも述べたが、シャンデリア、各種の家具、そして廊下に飾られている絵画などを含めて、まるで小さな美術館のようである。

これまでの旅先では一般的なホテルにしか泊まったことがなく、このようにキッチン、食器類、家具付きの宿泊先に滞在したことがなかったのも、このような宿泊場所をなんと表現したらいいのか迷う。調べてみると、オーナーの方は5世代にわたってこの建物を所有しているらしく、オーナー家族も住んでいるとのことである。なるほど、だからポーターの男性が、「姉妹がここに住んでいる」ということを述べていたわけである。ということは、あのポーターの男性は、このオーナーの息子さんなのかもしれない。いずれにせよ、とても趣き深い宿泊施設だ。

時刻はすでにいつも就寝している時間を過ぎてしまっている。実はこの宿泊先に到着した時に、2階のレストランの前に置かれていた観光案内のパンフレット類に目が止まり、そこで各種のクラシック音楽のコンサートがヴェネチア市内で開催されていることを見つけ、いくつか参加してみようと思いい、あれこれ調べていたのである。

事前に調べることをせず、滞在先で偶然見つけたコンサートに出かけていくというのは、ハンガリーのブダペストで参加した大聖堂でのオルガンコンサート以来かもしれない。明日、明後日、そして4日後の合計3回ほど、せっかくなのでコンサートに出かけてみようかと思う。コンサート会場はいずれも近く、全ての場所は徒歩で15分から20分ほどである。

書きたいことが山ほどあるが、やはり今の感動は一度胸にしまっておき、濾過された感動の結晶を明日から少しずつ自分の言葉で書き留めておきたいと思う。

宿泊先の目の前の運河は満月の光を優しく映し出し、何かをそっと語りかけている。夜空には小さく星々が輝いている。ヴェネチア滞在の初日の夜の雰囲気は、とても幻想的であり、この景観を忘れることは決してないだろう。ヴェネチア:2019/11/9(土)22:33

5163.【ヴェネチア旅行記】天空からの時空を超えた贈り物

満天の星空。まさかヴェネチアの地でかくも美しい早朝の空を眺めることができるとは思ってもいなかった。午前5時のヴェネチア上空には、なんとも見事な満天の星空が広がっている。この歴史的かつ風光明媚な街は、街そのものが輝きを体現しているだけでなく、輝く星空によっても光を授けられている。

昨夜、空港から市内に向かっている最中、ヴェネチアもまた近代化された街なのかと思っていたが、街に到着してみると、世界の多くの大都市のようにギラギラとした光はなく、むしろ外灯は少なく、幾分暗さを持っていた。逆にそれは私を喜ばせた。確かにヴェネチアは観光名所なのだが、人工的な明かりで飾り立てることをせず、そうした明かりを最低限に保っているように思う。だからこそ昨夜も今朝も、このように美しく光り輝く星空を眺めることができているのだ。

昨日はいつもより1時間ほど遅く就寝したのだが、ヴェネチアに到着した興奮と感動があったのか、今朝は昨日とほぼ変わらず4時半に起床した。昨日は4時に起床したので、30分ほどのズレである。目覚めてから、持参したココナッツオイルでオイルプリングを始め、それをしながらまずはヨガをしようと思った。それはいつものルーティーンなのだが、そこで私は部屋の窓を開け、換気をしようと思ったのである。

窓を開け、ふと空を見上げた瞬間に、その満天の星空が広がっていたのである。私はそれを想像していなかったので、随分と驚いてしまい、ヨガそっちのけで、今オイルプリングをしながらこの日記を書いている。

早朝の空に輝く無数の星々を眺めていると、彼らの名前が知りたくなった。もちろん、それらは人間である私たちが勝手に付けたものなのだが、それらを発見した人が何かしらの思いで付けた名前があるはずである。星に名前をつけた人の物語を読みながら、彼らの思いを汲み取り、そして星々とより親しくなるために、それらの名前が知りたい。来年日本に一時帰国した際には、ぜひとも星の名前のわかる辞典を購入しよう。それと合わせて、空の名前、花の名前などの辞典を購入したい。

世界には、私がまだ名前も知らない存在者たちで溢れているのだ。そうした存在者たちの名前を知りながら、まだ名も無き存在者とは、お互いに裸で向き合おう。

名前の無い彼らは、まだ何者でもないのだが、すでにもう完全に何者なのであり、私もまた何者でもないのと同時に、すでに完全に何者なのだから。

今からもう気の遠くなるような遙か昔に、この宇宙での役割を終えた星々たちの輝き。星の輝きは、彼らが自分の寿命を全うしたときに発する光だと言われている。もう何千、何万、下手をすると何億年も前にこの宇宙を去った星もあるかもしれない。そうした星々の生命の輝き、いや魂の輝きが、こ

うして時空を超えて自分の目に届けられていることを思うと、感慨深い思いになる。それらを肉眼のみならず、心眼や魂眼で見届けるということ。それが、こうした宇宙からの素晴らしい贈り物を受け取った者が果たすべき最低限の姿勢ではないだろうか。ヴェネチア:2019/11/10(日)05:21

5164.【ヴェネチア旅行記】自由になりたかったハエ〜彼が伝えたかったこと

昨夜11時まで起きてしまっていたのは、確かにヴェネチアに到着した静かな興奮によるものだったように思う。その他にも、昨夜の最後の日記で言及したように、その日記を書いていたために就寝が遅れてしまったこともあるし、今日から三日連続で参加するクラシック音楽のコンサートのチケットを手配していたこともある。それらのコンサートについては、また後ほど改めて書き留めておきたい。実は、それ以外にも就寝を遅らせた要因がある。それは何かというと、自分の部屋に迷い込んできた一匹のハエであった。

昨夜、軽い夕食を自室で摂った後に、風呂に入ろうと思った。いつもは風呂に入ってから夕食を摂るのだが、昨日はその逆だった。コンサートの案内パンフレットや、宿泊先のポーターの男性からもらった街の地図を眺めていると、ついつい時間を忘れてしまい、先に夕食を摂ることになったのである。

いざ入浴をしようと思い、ベッドルームに備え付けられている洋服を収納する家具——最近、名詞の名前をさっと思い出せないことがあり、「クローゼット」という名前であることを数分後に思い出した——を開けると、一匹のハエが中から飛び出してきたのである。それは随分と大きく、最初私はそれをアブか何かだと思った。だがそれは大きめのハエだった。そのハエは大きな羽音を立てながら、寝室を動き回っていた。それを見た時、「困ったな」と私は思った。

しかし、こうした家のような広々とした場所に私一人だけにいるよりも、ハエと一緒にの方がかえって楽しく過ごせるかもしれないと思った。とはいえ私は、このハエをまずは窓の外に逃がそうと思った。だが窓を開けてもハエが逃げる保証はなく、またもうすでに外は寒い時間となっていた。そのようなことを考えていると、ハエはリビングルームの方に移動し、そこからさらにキッチンルームの方に移動していった。そこで彼の姿を一度見失い、もうハエのことは気にせずに、入浴をしようと思った。浴室に行き、服を脱いだところで、再び大きな羽音がした。そう、先ほどのハエがここにいたのである。

まさかハエと一緒に風呂に入りたいがっているとは考えられず、このハエをどうするかを考えていた。すでに浴室の扉を閉めており、私は浴室の中で、ハエと二人つきりになった。

「一寸の虫にも五分の魂」という言葉を耳にしたことがあるかと思う。私は普段、できるだけこの言葉の原義に則る形で生きており、できるだけ小さな虫でも殺さないようにしている。部屋で虫に遭遇した時には、その種類にもよるが、可能なかぎり外に逃すようにしている。ハエもそのうちの一つだ。そうしたことからハエをやはり外に逃がそうと思ったが、それは密室にいるのだから、この際弱らせてトイレにでも流してしまおうかと思った。やはり自分の手で息の根を止めることは気が引けるため、弱らせるところまでは自分でやっておき、彼の命がどうなるかはトイレに委ねるといふ幾分責任を転嫁しようとする自分がある。虫をどうしても殺さないといけない時は、このようにして半分生きたままトイレに流すことがある。昨夜はそれをしようと思った。

そのためには、まずはハエを弱らせた上で捕まえなければならない。飛行する虫を弱らせる一番良い方法は、地面に叩きつけることであるということを経験上知っていたので、まずはバスタオルを使って、ハエを地面に叩き落とそうとした。すると、バスタオルが大き過ぎたため、それはうまくいかず、今度はコントロールが利きやすいハンドタオルに変えた。しかし、ハエの動きは想像以上に素早く、それもうまくいかなかった。しばらくハエと格闘したのだが、結局ハエを地面に叩き落とすことはできず、もうすでに私は裸だったから、いったん諦めて入浴を先に済ませることにした。

宿泊先の浴槽にはなんとジャクジーが付いており、それを使ってゆったりと入浴を楽しもうと思っていた。ところが、密室の浴室というのは、ちょっとした音響施設であって、ハエが飛ぶ音がやたらと響くのである。一寸の虫が奏でるちょっと不気味な低音を聞きながら、しばらくゆっくりと浴槽に浸かり、浴槽から出た後に再びハエを捕まえることを始めた。そこからいくらやってもハエを捕まえることができず、あまりタオルを振り回し過ぎていると、化粧鏡やそれに備え付けられているライトを壊してはならないと思い、ハエをいったんリビングルームに解放し、やはり窓から外に逃がそうと思った。

すると、リビングルームに戻ったハエは、窓を開ける前にどこかに消えてしまった。寝室の方に移動してしまったのかなと思った私は、そこからは他にやることがあったので、一旦はハエのことを忘れようと思った。そこで、運河を望むことができるリビングルームの窓を開け、輝く満月と夜空の星々を眺

めることにした。しばらく満月と星々の輝きに見入ったところで、体が湯冷めしそうだったので、窓を閉めることにした。

するとその瞬間である。先ほどのハエが部屋の窓から外に逃げ出していったのだ。彼の姿を見た時、彼は自由を求めていたのだと分かった。そして彼はまだ生きていたのだ。彼の命を奪わなくて本当に良かったと思った。

実は私は、ハエを地面に叩き落とそうと奮闘している最中に、「あれっ。もしかすると、このハエは以前は人間だった魂の生まれ変わりかもしれないな」ということを思ったのである。それは突拍子もない考えだったが、どこかそう思わせるようなハエだった。前世は人間だったかもしれないハエ。そしてその前世としての人間が、今の私と何らかの繋がりがあったがゆえに、私は安易にそのハエを捕まえて命を奪うことができなかったのだと思う。

一つの部屋に紛れ込んだ一匹のハエは、満月と星々で照らされた広大な世界に飛び出していった。その世界がいくら危険や未知に満ち溢れていたとしても、ハエの佇まいは凜としており、その背中には解放感が滲み出していた。そして、自由を得たハエには、魂が持つ本来の輝きがあった。それはもしかすると、満月や星々の輝きよりも美しかったと言えるかもしれない。「君にもそうした輝きがあるんだよ」ということを教えてくれるために、あのハエは私のところにやって来てくれたのかもしれない。ヴェネチア:2019/11/10(日)05:52

5165.【ヴェネチア旅行記】いつもと変わらない食生活

つい今し方、シャワーを浴び、心身共に目覚めさせた。とはいえ、それは無理やり心身を活動に向けて目覚めさせるようなものではなく、あくまでもゆっくりと今日の活動に備えるための準備のようなものであった。

自然の中での生活への憧れが高まるにつれ、本当に私の生活は自然の中に還っていくかのようなものになっている。それは食生活に現れているだけではなく、こうした入浴一つ取ってみてもそうだし、歯磨きなどを取ってみてもそうだ。歯磨きの際には、もう市販の歯磨き粉やマウスウォッシュなどを使うことはなく、オイルリングをした後にブラッシングをするようになっている。市販の歯磨き粉や

マウスウォッシュは、口内にいる悪い細菌だけを殺すのではなく、良い細菌までも殺してしまいそうであり、それはマウスウォッシュに関してはその通りだそうだ。

心身の健康を育むためには、腸内環境が鍵を握るのだが、腸内に入る食べ物が入ってくる口内環境をまず整えなければ何も始まらない。入りの部分が大事なのである。そうしたことから、歯磨き粉やマウスウォッシュなどを使わずに口内環境を整えていく生活を始めてもう7～8ヶ月となる。それに合わせて、自然と私は入浴の際にも石鹸やシャンプーなどを一切使わなくなった。もうお湯だけで体や髪を洗っているのである。それによって肌質や髪質が変わって来たように思う。しかもそれは良い方向にだ。

一体これまでの人生における数十年において、石鹸やシャンプーで体や髪を洗っていた自分は何だったのかとってしまうほどである。物質消費経済の罟と網に完全にかかった自分がそこにいたようだ。その圏外に出てみると、驚くほど自然かつ身軽な生活がそこにあった。浴室に置くものも減り、物質的にも精神的にも身軽になった自分がある。そのようなことをシャワーを浴びながらぼんやり考えていた。

今、フローニンゲンの自宅から持って来た小麦若葉のパウダーを水に溶かしたものを飲んでいる。起床直後に飲む一杯の水の後には、毎朝必ずこれを飲んでいる。その前に、持参したヘンプオイルを小さじ一杯ほど摂取した。今回は、それ以外にも毎朝飲んでいる大麦若葉のパウダーを持参することはなかった。そちらは瓶詰めのものであり、少々重たいと考えたからである。

ヴェネチア滞在中も有り難いことに、食生活が大きく変える必要がない。一人旅であるがゆえに、レストランに入って食事をするのは馬鹿らしく、基本的には近くのオーガニックスーパーで調達したものを食べていこうと思っている。宿泊先から徒歩1分ぐらい——小走りで20秒ほど——のところに、オーガニック製品を扱ったこじんまりとした店がある。昨夜はそこに立ち寄って来た。

店に入ってすぐのところには、オーガニックのサプリメントや化粧品のようなものが並んでいて、食品はあまり期待できないかと思っていたら、店の奥に食品も置かれていて、そこで八丁味噌、ピーナッツバター、豆腐、そして豆乳を購入した。特に私は、八丁味噌が置かれていることが嬉しかった。

味噌を持参するかを迷ったのだが、味噌も液体物に分類され、機内持ち込みのスーツケースしか持参しない私にとってみると、味噌を小瓶に移すのは少々面倒であるし、何よりも量を詰めることができず、量を詰めるならば小瓶をいくつも準備しないといけなかった。美味しそうな八丁味噌をその店で入手できたので、そうした手間が省けた。店員のイタリア人の男性はとても親切であり、レジで会計を済ませている最中に、「あなたは今日二人目の日本人ですよ」と笑顔で声をかけてくれた。

今日の分の必要なものはすでにあり、今日はその店が休みとのことなので、また必要なものがあれば、明日にでも店に立ち寄りたい。残念ながらその店には果物や野菜は置かれていないので、それらに関しては、街の中心部にあるオーガニックスーパーに立ち寄ろうと思う。その店も日曜日の今日は休みなので、明日にでも足を運びたい。

今の宿泊先は、食器、鍋、フライパン、ガスコンロが付いており—さらには塩や胡椒などの調味料まで置いてある—、なんでも揃っているので、調理もやろうと思えばできる。明日にオーガニックスーパーに立ち寄った際に、ジャガイモやサツマイモがあれば、レンジも付いているので、いつものようにそれをレンジで茹でて夕食にしようかと思う。また、玉ねぎやシイタケも購入できれば、いつものように味噌汁まで作ることができてしまう。鍋はあるが、さすがにベジブロスまで作るのはやり過ぎかと思うので、そこまではしないが、いずれにせよ、フローニンゲンの自宅にいる時となんら変わらない食生活を送ることができそうで何よりである。

今、目の前の運河からカモメたちの鳴き声が聞こえて来た。外を見ると、いつの間にか明るくなっていて、一日の始まりを告げている。運河を運行する船の汽笛のようなものが鳴り、ヴェネチアの街も活動に向けて目覚めたのだと知る。ヴェネチア:2019/11/10(日)06:44

5166.【ヴェネチア旅行記】機内から見たアルプス山脈の絶景を思い出して

ヴェネチアの気温は、フローニンゲンのそれと比べて、最高気温・最低気温ともに5度から6度ほど高いのだが、それでも朝晩はやはり冷え込む。冬用のジャケットのみならず、マフラーや手袋を持って来て正解だったし、ヒートテックを履いて来て良かったと思う。

つい今し方、部屋の窓辺に近づいていき、窓を開けて外の景色を再度眺めた。今日は雲ひとつない快晴であり、スカイブルーの空をカモメが優雅に飛んでいった。視線を下げると、そこには深緑色の運河が静かに揺らめいていた。

今回この宿泊先を選んで本当に正解だった。それは昨日の日記で書き留めたように、この場所が一つの美術館のようであったり、立派な家具や装飾品、そして調理器具が揃っているというだけではない。周りの環境がとても静かなのだ。

この宿泊先は、1400年代に作られた建物であり、いくらリノベーションをしているとはいえ、古さを感じさせるのは仕方なく、それがまた趣きを感じさせてくれていると言える。もっと綺麗でモダンな宿泊先は探せばいくらでもあり、確かに中央駅近くに良さそうなホテルを見つけたのだが、そこは人通りが多く、夜は少々騒がしいとのことであった。結果として、そちらを選ばずに、こちらの宿泊先を選んで正解であった。ここには、朝と夜の静けさが約束されている。

今もカモメたちの鳴き声がどこからともなく聞こえている。フローニンゲンの自宅で聞く小鳥たちの鳴き声とはまた違う声を発している。彼らには彼らなりの固有の声があるのだ。私もまた、自分の声を発していこう。言葉や音、それは自分の固有の声である。しかもその一つ一つの声は、人生のその瞬間でしか生み出されないものなのだ。そこに尊さと何物にも替えがたい価値のようなものを感じる。

アムステルダムスキポール空港からヴェネチアのマルコ・ポーロ空港に向かっている機内の中で、絵に描いたような、いや絵に描きようのないほどに美しい雄大な雪山を見た。地理に疎い私は、最初それをピレネー山脈かと思ったが、それはスペインとフランスの国境線あたりにあることを以前調べた時に知ったことを思い出した。フライトの経路を考えると、私が見た絶景はアルプス山脈だったのである。雄大な雪山たちが連なる姿は本当に見事であった。

フライトの時間は夕方であったから、夕焼けの薄赤紫色が上空に広がっていて、その下に雄大な雪景色があった。私は思わず息を呑んだ。隣に座っていたオランダ人らしき中年女性が写真を撮りだしていたので、窓際に座っていた私は、彼女が手に持っていたゴミを預かり、写真を撮影することを彼女に促した。その方は嬉しそうに写真を撮り、私にお礼を述べた。

夕日に映えるアルプス山脈の雪景色を眺められるとは思ってもいなかったもので、しばらくその見事な景色をぼんやりと眺めていた。すると、ぜひともこうした素晴らしい自然の美によって喚起された感覚を曲にしたいと思った。自分が見た自然の美しさを曲にし、その情景を眺めた時に感じられたことを曲にしていくのである。それを改めて行いたいと思った。現在学習中の教会旋法の何をどのように用いれば、目の前の景色とそれが喚起する感覚・感情を表現できるのかをぼんやりと考えていた。ヴェネチア:2019/11/10(日)07:12

5167.【ヴェネチア旅行記】永遠に受け継がれる旅～ヴェネチアという街が優しく語りかけて
来てくれたもの

私が高校二年生の時、父は数年間に及ぶマレーシアでの単身赴任を終えて日本に帰って来た。それまでの数年間は母と二人で生活をしてきたため、数年ぶりに父と一緒に生活を始めることが最初は少し違和感があったのを覚えている。そんな中、ある日父が、ドイツに出張に出かけ、出張から帰って来た時に旅行話をしてくれた。それは以前の日記でも書き留めたが、ドイツとの国境沿いにあるオーストリアの小さな街オーベルンドルフを訪れた話だった。

オーベルンドルフという街は、モーツァルトが生まれた街ザルツブルクから少し北上したところにある。数年前に私は、国際非線型ダイナミクスの学会に参加するためにザルツブルクを訪れた。その旅行計画を練っている最中に、ふと高校二年生の時に父から聞いた話を思い出したのである。オーベルンドルフの街には、「きよしこの夜」が生まれた教会がある。その教会の名前は、“Stille Nacht Kapelle (Silent Night Chapel)”という。

学会のためだけにザルツブルグを訪れるのはもったいないと思い、その5日前ぐらいからオーストリアに行き、まずはウィーンを十分に観光した後に、ザルツブルグでも数日間滞在する計画を立てた。その際に、ぜひとも足を運びたいと思って実際に足を運んだのがこの教会だった。

私は、当時15年以上も前に父から聞いた話をもとに、自分もまた父と同じようにその小さな教会の中にいることが不思議でならなかった。父から旅の話を聞いていなければ、私は決してその教会を訪れることはなかっただろうし、オーベルンドルフという街に足を運ぶことすらなかったであろう。

私にはまだ子供がいないが、もし仮に自分に子供ができて、万一この日記を読む日が来たのであれば、自分がどのような場所に旅に出かけ、そこで何を考え、何を感じたかを書き留めておくことにも幾ばくかの意味があるのではないかと思われた。

今私が宿泊しているのは、マルコ・ポーロ空港から一本で行けるシャトルバスが止まる大きなバス停から歩いて数分のところにあるResidence Palazzo Odoniという場所だ。この小さな宮殿のような宿泊施設には、おそらく5家族分ぐらいの部屋しかない。そのうちの1室に私は滞在している。

昨夜、ポーターに案内されて部屋に入る際に、部屋のドアに名札が取り付けられていることに気づいた。そこには、“Caravaggio”と記されており、それはこの部屋の名前を伝えていた。“Caravaggio”というのはどういう意味かを調べてみたところ、それはどうやら事物の名称ではなく、人名であった。そうそれは、バロック期に活躍したイタリアの画家ミケランジェロ・メリージ・ダ・カラヴァッジョ(1571-1610)の名前だったのだ。調べてみると、ヴェネチアとの縁は不明であったが、いずれにせよ、この部屋は彼の名前から取ったものだろう。いつか自分の子供や孫がこの日記を読み、ヴェネチアを訪れることがあったら、この部屋から眺められる小さな運河や夜の星空の美しさを伝えたい。

ある一人の人間の旅は、その人間の人生の中だけで完結するようなものではなく、それは開かれたものであり、その旅を受け継ぐ者がいるのだと思う。私が父の旅を受け継いだのと同様に、もしかしたら、自分の子供や孫、あるいは全く知らない人がこの旅を受け継いでくれるのかもしれない。それは自分がこの世を去った後かもしれない、いつかは不明である。ただし、自分のこの人生が決して閉じられたものではなく、仮に生涯を閉じたとしても、そこで生きられた人生そのものは永遠に向かって開かれたものであり、他者の人生と果てしなくいつまでも繋がっているのだと思う。朝日が降り注ぐ早朝のヴェネチアは、そのようなことを優しく私に伝えてくれた。ヴェネチア:2019/11/10 (日)07:38

5168.【ヴェネチア旅行記】本日の計画

まだ日中に街を歩いたわけではないのだが、私はもうヴェネチアの虜になってしまったようだ。街の建物は歴史を感じさせ、それは幾分古びた印象を与えるのだが、人工的に無理に新しいものを求めず、古いものをそのままに守っていく心意気を感じさせる。

本日訪れるサン・マルコ広場では飲み食いが禁止されており、ヴェネチア中に張り巡らされた運河をかける橋の上では立ち止まってはならないそうだ。また、ゴミを路上に捨てる则罰金の対象になるとのことであった。ヴェネチアがその歴史的な景観を保持する試みや制度にはその他にもいくつかある。そうした形で長きに渡って残っている街の景観を思うと、この街の取り組みには共感が持てる。

今朝は4時半に起床し、すでに時刻は8時を迎えようとしている。今、持参したカカオパウダーをお湯に溶かした飲み物を飲んでいる。

ヴェネチアを観光する本格的な一日が今ゆっくりと始まろうとしている。明日からは雨が續くようだが、今日はすこぶる天気が良い。雲ひとつない秋晴れであるから、今日中に思う存分ヴェネチアの街を歩き、市内の地理を把握しておこう。Google マップや手持ちの地図だけではなく、実際に街を歩くことによって、身体に地理を染み込ませていくのである。それはその街と同化することであり、より親密になるための手段でもあり、そうしてその街が自分の人生の一部になることは旅の一つの醍醐味だろう。

今、午前8時を告げる鐘の音が聞こえて来た。これはどの教会から聞こえて来ているのだろうか。教会から聞こえてくる鐘の音に耳を傾けながら、今日の計画について簡単に記しておきたいと思う。昨夜ホテルに到着した時に、偶然手に取ったパンフレットに掲載されていたクラシックコンサートに今夜出かける。それはヴィヴァルディの作品『四季』をメインとしたもので、二部構成となっており、その他には下記のような演目になっている。

前半

1. A. VIVALDI

Symphony in G major RV 149

Allegro molto - Andante - Allegro

2. J. PACHELBEL

Canon

3. A. VIVALDI

Allegro - Adagio - Allegro

後半

1. A. VIVALDI

The Four Seasons

1-1 “La Primavera” Op.8 n.1 in E major

Allegro - Largo - Allegro

1-2 “The Summer” Op.8 n.2 in G minor

Allegro not very much - Adagio soon - Soon

1-3 “Autumn” Op.8 n.3 in F major

Allegro - Adagio - Allegro

1-4 “The Winter” Op.8 n.4 in F minor

Allegro - Largo - Allegro

会場は、8世紀に建てられたScuola Grande San Teodoroという場所で、ここでI Musici Venezianiというオーケストラが演奏を行う。今日はまず最初に、会場の下見がてらこの場所を確認しておく。

今日のメインはなんと言っても、小松美羽さんの作品を見に行くことである。小松さんの作品が展示されているギャラリーは、サン・マルコ広場にあり、そこは午前11時から開くことである。宿泊先からギャラリーまでは、歩いて25分ぐらいの距離であるから、宿泊先を出発するのは午前10時半ぐらいでいいだろう。今日は快晴であり、本日初めてヴェネチアの朝を堪能することになるため、街の景色を味わいながらゆつくりと歩いて行こうと思う。

小松さんの作品を含め、ギャラリーでの観賞を十分に楽しんだら、どこかのカフェでひと休憩入れるかもしれない。普段はパンやお菓子を食べないが、カフェでイタリア名物のパンかお菓子をコーヒーと一緒に食べてみようかとも思う。その後、音楽博物館に立ち寄り、そこでしばらく時間を過ご

す。明後日はまた違う場所でクラシック音楽のコンサートに参加することにし、その会場である“Interpreti Veneziani”も下見をしておきたいと思う。その会場の前を通って場所を確認し、帰りはアカデミア美術館が近くにある橋を渡って宿泊先に帰ってこようと思う。ホテルで少し休憩をし、入浴や夕食を済ませてから、午後8時半からのコンサートに出かけていく。

一応30分前を目処に会場に到着しておくことが勧められているようなので、ホテルを7時半過ぎに出発しようかと思う。今日と明後日はその場所で、同じオーケストラの演奏する異なる演目のコンサートに参加する。コンサートについての感想はまた後ほど書き留めておきたい。ヴェネチア：

2019/11/10(日)08:56

5169.【ヴェネチア旅行記】小松美羽さんの作品を鑑賞しにサン・マルコ広場に行ってみたところ……驚きの光景が広がっていたヴェネチア

「な、なんじゃこれは～！」

午前10時半に宿泊先のホテルの一階に降りた時に私は思わずそう叫んだ。

そこに何が広がっていたかという、昨夜足を着けていたはずの地面が水に覆われて見えなくなっていたのである。つまり、運河が氾濫し、ホテルの一階まで水が上がって来ていたのである。

当初の計画では、今日と明後日に行われるクラシックコンサートの会場を下見した後に、サン・マルコ広場にあるギャラリーで小松美羽さんの作品を見ることをとても楽しみにしていた。それが今回ヴェネチアまで足を運んだ最大の目的であった。小松さんの作品を見た後は、音楽博物館に移動し、その足で、明日のコンサート会場の下見をしてホテルに戻って来る計画を立てていた。ところが

ホテルの出発から出鼻を挫かれる形になった。運河の水が溢れるというのはオランダでも見たことがなく、私は本当に驚いてしまい、思わず笑ってしまった。

なんとか水の少ない場所を爪先立ちしていけば扉まで辿り着けるかと思ったが、水深は思っていたよりも深く、靴が濡れ、靴の中まで水が浸水して来る恐れがあった。観光からの戻りがけであればま

だしも、出だしから靴の中が濡れるのは避けたかったが、もう前に進むより仕方なかったので、意を決して扉まで辿り着いた。そして扉を開けるとそこに広がっていたのは、当然ながら運河の水で浸水しきった道だった。建物の脇がまだなんとか水深が浅かったので、引き続き爪先立ちのような形でさっと浸水がない道まで出た。

確かに靴は随分と濡れてしまったが、なんと幸運にも、靴の中には浸水しておらず、とても助かった気分になった。今回旅に履いて来たのはスエードの靴であり、スエードの靴は雨に弱いだろうと思っていた。ところが先ほど調べてみると、ヨーロッパでは、スエードの靴は「レインシューズ」と呼ばれるほどに雨に強いことがわかったのである。道理で水が中に染み込んでこなかったわけである。なんとか無事に浸水していない道まで出ることができた私は、とはいえその先が思いやられた。

少し歩いたところに出店があり、偶然外にビニールで出来た長靴が売られているのを見つけた。もうこれは購入するしかないと思った私は、それを購入することに決めた。ちょうど店員の女性の方が外に出て、長靴を眺めている私がいることに気づき、声をかけてくれた。その店員曰く、「冬の時期になると、運河の水が溢れ出し、このように浸水してしまうことがあるんですよ」と教えてくれた。私はそんなことがあるなどと全く知っておらず、改めてとても驚いた。これもまた地球の環境異変か温暖化の影響なのだろうか。

いずれにせよ、今日も含めて残りの5日間でもまだまだ長靴を使う機会がありそうであるから、Mサイズのを迷わず購入した。店を出発してみると、確かに浸水していない道もあり、そうした道の方が多かったのだが、一方で完全に水に浸りきっている道もちらほらあった。そして何より、私と同じような長靴を履いている人が数多く道を歩いていたのである。

そこから私はまずコンサート会場を目指した。すると、携帯のGPSがうまく機能せず、すぐさま道に迷った。だが幸いにも、ヴェネチアの入り組んだ道をつぶさに眺めてみると、主要な観光名所の名前と方向が記された看板が随所にあり、それを辿っていけば目的地に辿り着けると思った。そこからは、その看板を目印にして歩みを進めていった。

ヴェネチアを代表する橋、通称「白い巨象」とも呼ばれるリアルト橋を目標地点にしていたのだが、その橋の前の通りが完全に浸水しており、そこで再び長靴を履き、早速長靴が活躍した。橋を無事に渡ると、また乾いた道になったので、そこでまた長靴を脱いだ。

そしていよいよサン・マルコ広場に到着し、広場を一目見た瞬間に、またしても驚くべき光景を目の当たりにした。サン・マルコ広場はもう完全に水で浸水しきっており、30cm近く水で浸りきっていた。「長靴を持たらざる者サン・マルコ広場に立ち入るべからず」とでも言わんばかりの光景がそこに広がっていたのである。私はもう可笑しくなってしまうて、笑ってしまった。

そこでまた長靴を履き、水の中をズンズンと進んでいくと、そこには長靴を履いた人たちが楽しげに広場をゆっくりと進んでおり、いろいろな形で記念撮影をしていた。それはもう愉快的な光景であった。また面白い光景としては、アジア人の二人の新郎新婦が、結婚式のドレスを着たまま長靴を履いて広場を歩いていたことだ。それを見ていたイタリア人の中年の女性が、「結婚おめでとう！忘れられない結婚式になったわね」と笑顔で述べていた。それもまたとても微笑ましい光景であった。

そこから私は、水浸しになったサン・マルコ広場を歩きながら、目的のギャラリーに向かった。サン・マルコ広場は宗教的にも非常に重要な場所であり、格式高い場所なのだが、ハトがブカァ〜と優雅に浮かぶ姿を見て、また笑みが溢れて来てしまった。私は思わずハトに向かって、「今日は君の方が早いね」と独り言を呟いた。

水をかき分けながら、子供の頃に戻ったかのような気持ちで水中を歩いていると、ようやくギャラリーを見つけた。このギャラリーは毎日午前11時から開いており、時刻は11時半ごろだったので、水浸しの中、扉を開けてみようとしたところびくともしなかった。「あれっ、おかしいなあ？浸水のせいかなあ」と私は思い、再度扉を開けてみようとした。中を見ると、薄暗くなっており、人の気配が全く感じられなかった。

それでも私は何度も扉を開けようとしたのだが、結局扉は開かず、今日はおそらく臨時休館となったのだらうと思われた。それを知った時、小松さんの作品を見ることを楽しみにここまで来たのでとても残念な気持ちになった。しかし、ここまでの道中でとても珍しい光景を眺めることができ、そして私自身がその光景の体験者でもあったこともあり、妙に気分が明るくなった。

今時刻を確認すると、コンサートに出かけていく時間となっていた。まだまだ書きたいことがあるのだが、その続きはコンサートが終わってホテルに戻って来てからか、また翌朝書き留めておきたい。いずれにせよ、ヴェネチア初日の観光は本当に忘れられない体験ができたため、ある意味で大満足であり、今後の人生においても記憶に残り続けるだろう。ヴェネチア:2019/11/10(日) 19:30

5170.【ヴェネチア旅行記】I Musici Venezianiのコンサートに参加して～ヴィヴァルディの四季より

つい先ほど、ヴィヴァルディとパッヘルベルの楽曲を楽しむコンサートから戻って来た。

今日もまた満月が見事である。満月の姿を眺め、月明かりを追うかのようにしてコンサート会場に向かう私の足取りはとても軽かった。

会場に向かった時間はもう辺りは真っ暗であり、昨日の日記で書き留めた通り、ヴェネチアの街には人工的な明かりがそれほど多くない。そうしたことから、入り組んだ路地の道は一段と暗さが増しているのだが、危険な香りはせず、むしろどこか安心した気持ちで道を歩いていた。また、人工的な光がなくても、月が照らす月道を歩くことはどこか気分を高めてくれていた。満月の見事な輝き、そして星々の輝きを今夜もまた堪能できたことを有り難く思う。

会場までの行き道に関しては、午前中に歩いていたこともあり、迷うことなく会場に到着できた。会場に到着すると、30分前にもかかわらず、すでに客が会場に入り始めていた。

コンサートに参加する機会はそれほど多くないため——何せ普段は就寝時間が早いため、夜のコンサートに行くのは滅多なことでない限りない——、コンサートに参加するときは大抵良い席を確保するようにしている。今回も一番良いカテゴリーの席を予約した。

今回演奏するオーケストラは、I Musici Venezianiという名前であり、彼らのユニークなところは、バロック時代の衣装を忠実に再現していることである。なんと、会場の案内役の人たちまでもがバロック時代の衣装を着ており、どこかタイムスリップしたかのような感覚があった。

会場が開いてからは開演まで非常にスムーズであり、席に案内されてからしばらくしてコンサートが始まった。演目に関しては、今朝方の日記に書き留めた通りである。

今日の昼間に音楽博物館に行き、ヴィヴァルディがヴェネチア生まれであることを初めて知り、ヴェネチアでしか育まれぬ感性を持って一連の楽曲を生み出していたのだと改めて感じた。演奏を聴きながら、今この瞬間にヴェネチアにいる自分は、その曲が醸し出すヴェネチアらしさを汲み取ろうとしていた。

ヴィヴァルディの曲がひと段落し、次はパッヘルベルのカノンが演奏された。カノン進行は、私のお気に入りのコード進行の一つであり、その原曲であるパッヘルベルのカノンを聴けたことは大きな幸運であった。その後前半では再度ヴィヴァルディの曲が演奏され、いったん小休憩に入った。休憩後、前半にはいなかった一段派手なバロック衣装に身を包んだヴァイオリニストが登場し、彼がステージの中央に立って演奏を始める形で後半が始まった。演奏者のすべての衣装がお洒落であり、華やかだったのだが、彼の衣装はより一層ゴージャスさがあった。そして、ヴァイオリンの演奏もまた格別であった。

後半は、ヴィヴァルディの『四季』が演奏された。私はこの曲をかつて大学時代に一日中、文字通り睡眠中もかけていた日があったことをふと思い出した。四季だけを延々と30時間ぐらい繰り返し流していたことがあったのである。そんな思い出にも浸りながら、全ての演奏を十分に楽しんだ。コンサートの余韻を噛みしめながら、私は再び満月に照らされた入り組んだ道をかいくぐっていきながら帰路についた。

今日の演奏もまた、色々と忘れられない体験になった。この体験はこれからゆっくりと自分の内側で消化されていき、ふとした時に何度も今日の体験を思い出さだろう。明日以降も今日の体験を思い出した都度、何か文章を書き留めておきたい。そして何より、今日のコンサートから得られた感覚を曲の形にしておきたい。ヴェネチア:2019/11/10(日)22:51

5171.【ヴェネチア旅行記】ヴェネチア滞在3日目の計画

時刻は午前5時を迎えようとしている。今朝も昨日と同様に、4時半過ぎに起床した。昨日は、ヴェネチアの街の一部が運河の水に浸水しているという事態に見舞われたが、そうした中でも街中を歩き回り、それは良い運動になっていたようだ。おかげで昨夜はぐっすり睡眠を取ることができ、一度も起きることのない快眠であった。

起床してすぐにオイルプリングを始め、今この日記を書いている。さて今日はどのようなことが起きるであろうか？別にハプニングを期待しているわけではなく、今日という一日を通じて私は何を見て、何を感じ、何と出会うのが楽しみなのだ。それは特段旅先だけで感じるものではなく、毎日の日々においてもそうである。人生が旅そのものであると言われる所以はそのあたりにもあるのではないかと思う。

先ほど目覚めてみると、随分と部屋の温度が下がっているように思えた。おそらく外はもっと寒いだろう。天気予報を調べてみると、今の外の気温は8度とのことであり、思ったほど低くない。フローレンスであればもっと低いだろう。とはいえ今日は最高気温が11度までしか上がらず、最低気温との差はほとんどないようなものである。今日もヒートテックを履き、マフラーを持って街に繰り出していきたい。

ヴェネチアは、あいにく今日から旅の終わりまでずっと雨のようだ。今日はホテルを出発するまではなんとか晴れかもしれないが、一日の大半は雨が降ることである。ヴェネチアの雨はどのようなものなのだろうか。まさか昨日同様に、道路が水で浸水してしまうぐらいなのだろうか。もちろんそれは冗談だが、ヴェネチアの雨がどのようなものなのかを幾分楽しみにしている自分がいる。

雨もまたこの地球にとって、そして自分の人生の日々にとってもなくてはならないものであり、また何より、秋のヴェネチアの雨もまた趣き深いものがあるだろうと思う。旅に出かけている最中は晴れに恵まれることが多い自分にとって、今日から最終日まで雨というのもまたいつもと違って興味深い。

それでは簡単に今日の計画について書き留め、部屋が冷えていることもあるため、シャワーにでも入って体を温めようと思う。今日は午前中から、モダンアートを多数展示していることで知られたペギー・グッゲンハイム・コレクションという美術館に足を運ぶ。開館と同時に美術館に行くというよりも、開館のタイミングでホテルを出発したい。今はまだ確認していないが、今朝方の浸水具合はどのようなのだろうか？毎朝天気予報を確認するだけでなく、ヴェネチアの地では、朝に道路が水に浸っていないかを確認しなければならないかもしれない。

いずれにせよ、朝はゆったりとホテルで過ごし、10時を目処にホテルを出発する。この美術館はそれほど大きくはなさそうなので、2時間から3時間ほどの滞在になるだろうか。ゆっくりと作品を鑑賞した後に向かうのは、サン・マルコ広場だ。昨日は浸水のせいで、残念ながら小松美羽さんの作品を見られるギャラリーが閉まっていた。今日もう一度ギャラリーに足を運び、ギャラリーがやっているかを確認したい。

昨日はあれだけの浸水被害に遭っていたサン・マルコ広場なのだから、今日どれくらい水が引いているのか分からず、こればかりは行ってみなければ状況がよくわからない。幸いにもギャラリーが開いていたら、そこでゆっくりと作品鑑賞をして、その足で街の中心部にあるオーガニックスーパーへ行き、果物などの必要なものを購入し、ホテルに戻ってくる。

昨日と同じように、午後5時までにはホテルに一度戻って来て、そこから少し日記を書いたり、入浴をしたりしてゆっくりとした時間を過ごす。夕食を軽めに済ました後に、今夜もまたクラシック音楽のコンサートに出かける。

今夜は昨夜と異なり、別の会場で行われるコンサートに参加する。その場所は既に昨日確認済みであり、宿泊先から徒歩15分ほどなのでとても近い。今日もまたヴェネチアの街でどのような出会いがあるか楽しみであり、それらの出会いを通じて、自分の中にいる新たな自分、つまり成熟の可能性を見ることができたらと思う。ヴェネチア:2019/11/11(月)05:13

5172.【ヴェネチア旅行記】今朝方の夢

つい今し方、ゆっくりとシャワーを浴び、心身を目覚めさせた。ヴェネチア観光三日目の朝がゆっくりと始まりを告げている。

時刻は午前6時を迎えようとしたところである。まだ辺りは暗く、今日は早朝は曇り空、昼前から雨が降り始めるとのことなので、朝日を拝むことはできないかもしれない。

昨日はヴェネチアの街を歩いてよく見て周り、自分の内側に新たな刺激が流れ込んでくるかのように感じた。それを消化・咀嚼するかのように、今朝方は夢を見ていた。

夢の中で私は、なんとヴェネチアの街にいた。旅先がすぐに夢の中に溶け込んでくることはそれほどない私にとって、それは驚きであった。実際に夢の中の私は、「あっ、現在滞在中のヴェネチアが目の前に広がっている」という気づきの意識があった。ひょっとすると、それが夢だということすらもどこかで察していたのかもしれない。

ヴェネチアの入り組んだ路地裏を通りながら、私はその景観を楽しんでいた。するとあるところで運河を架ける橋に出くわした。橋を渡ろうと一歩を踏み出したところで場面が変わり、私の目の前には見知らぬ若い女性が数名と、大学教授のような男性が数名ほどいた。大学教授の男性に関しては、どうやら日本で卒業した大学の先輩にあたる人のようだった。そして若い女性に関しては、彼女たちは私の母校の入試を先日受けたようだった。とはいえ、彼女たちは高校生ではなく、既に成人であった。

女性のうちの一人の話によると、後期試験においては、私が卒業した商学部はなぜか英語と物理のみが試験科目となっていたようだった。その話を聞いた時、「商学部の入試で物理？」と疑問がよぎった。その理由は定かではないが、本来、英数の後期試験がなぜかそのうちの一つが物理になっているという奇妙な事態だった。その点についてしばらく考えていると、また夢の場面が変わった。

次の夢の場面では、小中高と付き合いの長い女性友達の一人(MH)と共通の友人の数名とパン屋か何かの店の中にいた。すると突然、彼女が今からクイズを出すとのことだったので、みんな立ち上がりクイズに答えることにした。彼女が問題を読み上げている最中、私はクルミを食べながらサッカーのリフティングをしていた。クルミをよく噛みながら、ヘディングでリフティングを続けていると、彼女は「随分余裕ね」と私に述べた。それに対して私は、「だってもう答えは知っているから」と答えた。

私にとって彼女が出すクイズの問題はとても簡単であり、少しばかり退屈さを感じてしまうほどだった。そして実際にクイズに正解すると、私の体は小中学校時代を過ごした社宅の前にいた。社宅の前には駐輪場があり、その前を通っていこうとすると、そこでも小中高時代の女性友達の一人(AK)がいた。彼女に話しかけようとする、駐輪場の脇の公園から、バスケ部時代の先輩(KT)が現れ、私にバスケかサッカーの助っ人として今から一緒に来てくれないかと言われた。特に用事のなかった私は、先輩の申し出を断ることをせず、先輩についていくことにした。

そこで夢から覚めた。夢から覚めた瞬間に、部屋のクローゼットの方を見ると、向こうの部屋に繋がっているような小窓が見えて、そこに誰かが立ってこちらを見ているような気がした。それは気のせいだろうと思い、数分目を閉じたままにして電気をつけてみると、やはり私の錯覚であり、そこには壁と壁にかかった一枚の絵画しかなかった。ヴェネチア:2019/11/11(月)06:09

5173.【ヴェネチア旅行記】イタリアのピザのなんたる美味さよ～自分の中の食いしん坊

時刻は午前6時を迎えた。まだ雨は降っておらず、ヴェネチアの静かな朝が広がっている。

少なくともヴェネチアの中心部はビジネス街といった印象がなく、ヴェネチアの人たちはどこで働いているのかが気になった。私の頭の中には会社勤めが真っ先に浮かんで来て、そういう人たちの姿をヴェネチアではほとんど見かけず、その代わりに現地の人たちは自分の店を営んだり、会社勤めではない何か他の仕事に就いているのかもしれないと思った。ヴェネチアに到着したのは土曜日であり、昨日は日曜日であったから、今日は平日のヴェネチアの姿を初めて見ることになる。

先ほど、デン・ハーグに住む友人の日記を読んだ。旅先でもふと読みたくなる彼女の文章には、いつも大切なものが込められているように思う。友人の日記を読んでいると、食に関する話がなされており、ちょうど私が先日その友人の食実践と睡眠のあり方について言及していたことに触れられていた。実際には無意識の底から突然現れた言葉だったのだが、私は親しみを込めてその友人のことを「惰眠を貪る食いしん坊」と表現していた。その言葉が生まれた時にも、そして今でもそれは随分と失礼な言葉だと思うが、そこにはやはり親しみの念があり、その言葉が指す一般的な意味は込められていない。そこで私はふと、そうした言葉を用いて友人を表現したのは、自分の影の部分の投影なのではないかと思ったのだ。つまり、自分の中のまるで決め事のように、惰眠を貪らないようにし、食事を食べ過ぎないことが望ましいという思いが存在しており、それを実現させるために、友人に対する心理的投影として放った言葉が上記のものだったのかもしれないと思ったのである。

普段食事を相当に厳格なものにしている私も、昨日はなんとピザを食べた！トマトとチーズがふんだんに使われ、マッシュルーム入りのとても美味しいピザだった。食後のコーヒーとしてエスプレッソも頼んだ。乳製品を控えている私にとって、久しぶりのチーズであり、それは美味しく感じられた。ま

だ一軒しかレストランに入っていないが、街の至るところにあるイタリアンレストランを見ていると、やはりイタリアの飯は美味いと述べても問題ないのではないかと思う。

実のところ、昨日の昼は昼食を抜いて観光しようと思っていたのだが、浸水のために色々と計画が崩れてしまい、トイレが使用できる施設に一度も入らないまま13時になっており、トイレに行きたくなくなってしまったのだ。トイレの使用がメインで、実は昼食を食べるつもりはほとんどなかったのだが、確かにその時は空腹であったから、普段の旅の原則である「昼食は食べずに動く」という決まりを破る形でレストランに入ったのである。結果として、あれだけ美味しいピザが食べられたのだから、とても満足である。

私の中にもいる「食いしん坊」が顔を現し、「これだけ美味しいピザが食べられるのなら、明日から最終日まで、昼食にピザでも食べるか」という考えが芽生えた。今思い返すと、自分の中の食いしん坊と自分との対話は微笑ましいものがある。

イタリアの本場のピザは本当に美味しく、自分の中の食いしん坊には申し訳ないが、やはり今日からは昼食は食べない。そして、自分の腸内環境に合致したものだけを食べるようにする。

友人の日記のおかげで、自分の内側にいる食いしん坊の存在に気づき、その存在が投影現象を引き起こすこともあるのだということに気づくことができた。自分の中の食いしん坊が暴れないように、彼を抑圧することなく、自分の心身に最も合致した、厳選した美味しい食べ物を彼に与えてあげようと思う。先ほど大さじ一杯にたっぷり摂った八丁味噌はその一つだろう。午前中に食べるバナナに塗るピーナッツバターは、彼のために気持ち多めにしてあげよう。自分の中の食いしん坊をだしにして、実は私も食いしん坊なのかもしれない。ヴェネチア:2019/11/11(月)06:52

5174. 【ヴェネチア旅行記】 親切心のバトン

一羽のカモメが天に向かって高らかと鳴き声を上げながら飛び去っていった。ヴェネチアの平穏な休日が過ぎ去り、今日から平日を迎える。今のところ、昨日と何ら変わることなく、平日のヴェネチアの街にも緩やかな時が流れているように思う。街の景観が歴史を感じさせるためか、悠久の時間が流れているように感じられる。

今、ホテルのレストランから焼きたてのパンの良い香りが漂って来ている。基本的に私は、旅先ではホテルのレストランで朝食を食べることなく、自分の持参した食べ物や、滞在先近くのオーガニックスーパーで購入した果物などを食べるようにしている。だが昨日の昼食にレストランでピザを食べ、その美味さに心底感激したことからも、イタリアのパンもきっと美味しいのだと想像される。

先ほど、リビングルームの窓を開け、地上を確認してみた。昨日は、ホテルの目の前の通りが浸水しており、それは夢にも思わなかった事態であった。先ほど、恐る恐る確認してみたところ、今日は大丈夫そうだった。今日は長靴を履く必要はなさそうであり、この調子だと、今日こそサン・マルコ広場のギャラリーで小松美羽さんの作品を見ることができるかもしれない。

昨日は当初の予定を柔軟に変え、明日に訪れる予定だったアカデミア美術館を訪れた。この美術館には、14世紀から18世紀にかけてのヴェネチア絵画を中心として、およそ2,000点の作品が所蔵されており、充実した作品群を存分に楽しむことができた。

旅行中は色々と小さなハプニングに見舞われるのだが、この美術館でもちよつとしたことがあった。受付でチケットを購入し、オーディオガイドを受け取った私は、その数分後になんとチケットを紛失してしまったのである。鑑賞のスタート地点には、女性の係員が数名ほどいて、何やら楽しげに話をしていた。彼女たちのチケットを見せようと思って、それらしきものを渡した時、それはレシートだと笑われてしまった。

チケットが財布やポケットを探しても見つからず、受付の人がチケットを渡し忘れたのだと思って、また受付に引き返した。ところが受付の女性は困った顔をして、「先ほど確かにチケットを渡しましたよ。もう一度ポケットやロッカーなどを調べてみてください。もしなければ新しいのをもう一枚お渡します」と述べた。そのため、もう一度ロッカーに行き、探してみたが、結局それは見つからなかった。

イタリア人の若い世代の英語は比較的綺麗だが、ある年代を超えると、日本人並みにきつい訛りが英語に混入しており、かなり聞き取りにくいことがある。受付の女性はそうした訛りを持っており、新しいチケットをもう一枚渡してくれるということを聞き間違えて、もう一枚新しいチケットを購入しなければならないと述べたのだと私は勘違いをしていた。結局探してもチケットが見つからなかったこと

を告げると、その受付の女性は親切にも新しく一枚チケットを発行してくれた。私は勘違いをしていたため、また支払いをしなければならないと思っていたが、そうではなかったようだ。

受付の方にお礼を述べ、もう一度スタート地点に待つ係員の女性たちのところに行くと、彼女たちは一様に笑顔を増かべ、「いや～、チケットが見つかって良かったですね～」と述べ、一人の女性は私の肩をポンポンと叩いた。「いや、実は新しいチケットを発行してもらったんです」と素直に述べると、そこでも彼女たちはまた笑顔を増かべてひとこと、ふたこと述べた。そのようなやり取りを経て、少しばかり陽気な気分になって作品鑑賞を始めたのを覚えている。

実はロッカールームでも一つエピソードがあった。ロッカーを使用する際に必要な1ユーロ硬貨を私は持っておらず、手元には2ユーロ硬貨しかなかった。すると、二人の年配の夫婦がロッカールームにやって来たので、両替をお願いしたところ、二人も小銭を持っていないとのことだったが、ちょうど二人はこれから美術館を後にするとのことであり、私に1ユーロを渡してくれた。

婦人の方が、「両替ができないからこれを受け取って」と述べてくれ、その親切心に私は大変感謝をした。私が2ユーロを代わりに渡そうとすると、その婦人の方はそれを拒み、「大丈夫よ」と述べて土産屋の方に去っていった。親切な行為というのは、こうも人の心を温かくするのだと思った。ロッカールームで小銭に困っている人がいたら、受け取った1ユーロをその人に渡してあげ、親切心のバトンを受け継いでいこうと静かに誓った。受け取った1ユーロには、どこかその金銭的価値以上のものが込められているように思われた。ヴェネチア:2019/11/11(月)07:26

5175.【ヴェネチア旅行記】おっちょこちよいな私と親切心が仇になる私

先ほど、昨日に訪れたアカデミ美術館でのエピソードについて書き留めていた。結局、紛失したと思われたチケットは、財布の札入れの中に入っていた。普段現金をほとんど持ち歩かない私にとって、大きな金額のユーロ紙幣はほとんどなく、50ユーロ札と100ユーロ札(こちらは欧州内では一般的ではなく、スーパーなどで提示すると、透かしを確認されてしまうぐらい使用頻度は低い)を入れるための札入れ部分は全くと言っていいほど使われていない。なぜだか、私は受付で受け取ったチケットを、小さい金額の札入れの方に仕舞うのではなく、大きい方に仕舞っており、財布の中を探しても見つからないと困ってしまっていたのだった。

実は私は一般常識に欠けている。それは知識的な意味でというよりも、行動的に一般的ではないと思われることをよくやりがちであり、普通の人を考えればすぐにわかることを、行動してみなければ自分には全くわからないということがよくある。

紛失したと思ったチケットに関しても、財布を調べる際には、大きい金額の札入れを調べることは普通のことだと思うが、私の無意識にはその部分はないものとして考えられており、そこを調べることをしなかった。今振り返ってみると、なぜないものとして思っていたはずの場所にチケットを仕舞ったのか謎である。

もう一つ昨夜あったエピソードとしては、現在宿泊中の宮殿のようなホテルでは、一般的なホテルで使用されているカードキーはなく、物理的な鍵を使う。ホテルにやって来た当日に、ポーターの男性から三つの鍵がセットになった重たい鍵を渡され、一つは部屋用、もう一つは金庫用、そして最後の一つは外の扉用だと教えてもらった。念のため、もう一度復唱してもらい、自分が正しく鍵を認識したことをそこで確かめた。

しかし昨日の夜、ホテルに戻って来て扉の前に立ったところ、何をどう頑張っても鍵が開かなかったのである。美術館での思い込みがあったから、最初私は、部屋用の鍵と扉用の鍵を間違えてしまったのかと思い、どちらも試したが、どうしても鍵が開かなかったのだ。というよりも、鍵穴に鍵が入らなかったのである。ホテルに到着した晩に、近くのオーガニック専門店に立ち寄った帰りには扉をすぐに開けることができたので、どうしたものかと思っていた。しばらく扉の鍵穴と格闘していると、私はふと気づいた。そこは宿泊先の扉ではなく、その隣の居住施設の扉だったのである。道理で鍵が開かないわけだ。鍵が間違っていたわけでも、鍵穴への差込み方が悪かったのでもなく、扉がそもそも違ったのである。私はこの失態に自分でも笑ってしまった。こうした笑いをこの旅の間に何度したことであろうか。

そのような出来事があったことを思い出していると、美術館の館内でオーディオガイドを聞いていると、イギリス人らしき女性に声をかけられたことを思い出した。

イギリス人らしき女性:「すみません。オーディオガイドから音声がよく聞こえず、故障かもしれないのですが、どうやって使ったらいいか教えてもらえますか？」

私:「はい、まずはスタートボタンを押して、その次に作品番号を入力するとガイドが聞こえて来ますよ」

イギリス人らしき女性:「ありがとうございます。う～ん、でもやっぱり聞こえて来ませんね。ちょっと受付に行って新しいものに替えてもらって来ます」

その女性に声を掛けられ、オーディオガイドの使い方を教えて欲しいと言われた時、私は待つてましたと言わんばかりの気持ちになった。というのも、その数分前にロッカールームで見知らぬ夫婦から1ユーロをもらうという親切な行為をしてもらったばかりであり、自分も誰かに親切な行為をしたいと思っていたからである。

その時の私は本当に、「これからは困っている人がいれば率先して手を差し伸べ、親切なことをしよう」と思っていたのである。まさに「願えば通じる」という言葉の通りに、親切心を発揮する場面がやって来たと私は思った。そのイギリス人女性にオーディオガイドの使い方を教えた後、先ほどまで聞こえていた自分のオーディオも聞こえなくなっていた。「おかしいなあ。自分のオーディオガイドも故障か?」と思っていたところ、先ほど女性に教えた再生方法が間違っていたことに気づいたのである！正しくは、作品番号を入力してからスタートボタンを押す必要があったのである。それを知った時、親切心を発揮したと思っていた自分は嘘を教えていたことを知り、親切な行為をした自分に対するある種の陶酔感が一気に覚めた。

女性には悪いことをしたと思いながら、親切にしようと思気込むと、それが仇になることを教えられたように思えた。親切心を発揮するというのは自然な形が一番だ。今日は夕方にオーガニックスーパーに立ち寄るが、今後は親切心もオーガニックなものにしていこう。ヴェネチア:2019/11/11(月) 07:53

5176.【ヴェネチア旅行記】自由の刑から解放されつつある自己:新たな感覚の芽生え

自由。絶対的な自由の背中がもう見えている自分がある。哲学者のサルトルはかつて、「人間は自由の刑に処せされている」と述べた。昨日の夜にコンサート会場に向かって歩いている時の私は、自由の刑から解放されつつあることを感じ、自分が真の自由を享受する手前にまで差し掛かっているかのように感じられた。

創造活動と旅。それだけをして生きていく日々。それらの活動を通して社会に積極的に関与し、自己を深めていく日々を送っていく。そうした日々がもう完全に実現されつつあるを感じている自分がある。こうした日々をこれからも送っていこう。自由の刑から解放され、絶対的な自由の中で毎日を生きていこう。そのようなことを改めて思ったことをふと思い出した。

昨日と同様に、午前8時を告げる鐘の音が聞こえて来た。それはとても心地良い響きを持っていて、ヴェネチアの街に波紋のように広がっていく。

音楽。それが持つ素晴らしさを改めて昨日のコンサートでも感じた。今夜のコンサートでもまたそれを感じるだろう。

自分にできることは質素な生活と旅を続けていくこと、そして日記の執筆と作曲である。本当にそれしかなく、逆に言えばそれがある。それが強く深く自分の生に根付いているということを実感する。

昨日にアカデミア美術館を訪れた時に、思わぬ発見があった。この美術館の所蔵作品は、キリスト教関係の宗教画が圧倒的多数を占めている。これまでの私は、キリスト教関係の宗教画がどうも自分の内側に入っていないことを気にかけていた。それは私がキリスト教を信奉しているわけではなく、またキリスト教が真に根付いている西洋社会で生まれ育たなかったことから当然と言えば当然かもしれない。

ふと私は、アメリカの西海岸に留学していた一年目の夏に、ボストンに旅行に出かけ、ボストン美術館を訪れた際に見た仏像を思い出したのである。その見事な仏像を見た瞬間、私の心は何かに掴まれたかのような感覚になり、仏像が醸し出す何かが自分の内側に流れ込んできたのである。それはある芸術作品との深層的な出会いを示す象徴的な体験と言えるかもしれない。

いずれにせよ、その時の自分を改めて思い出すと、やはり私の深層部分には、仏教的な何か、あるいはアジア的な何かが横たわっていて、その仏像はそれと共鳴したのだと思う。それと似たようなことが、昨日アカデミア美術館でも起きた。より具体的には、キリスト教の宗教絵画が感覚として理解できる自分がそこにいたのである。作品を前にした時、以前にはなかったような感覚が自分の中に芽生えていることがわかり、作品が言わんとしていることが自分の内側に静かに流れ込んでくるという体験をした。その感覚が芽生えるまでに、欧米で暮らす8年の時の発酵過程が必要だった。

欧米社会に浸透するキリスト教が深層的に持つある感覚質を理解し始めるまでに、実に8年の歳月を要したのである。それが早いのか遅いのかはわからない。そしてそれは大した問題ではない。重要なのは、自分がそうした感覚の芽生えを経験し始めたということであり、自分の中で新しい感覚が開かれつつあるということなのだ。おそらく、キリスト教社会に住む人たちは、この感覚を共通に持っているのだろう。その国の言葉をいくら表面的に理解したからといって、その国の文化に横たわるこうした深層的な感覚を掴まなければ、その国の文化を理解することはあり得ないのではないかと思う。

真に異国の文化を理解するというのは、そうした深層的な感覚なしでは成し遂げられないのではないだろうか。そのようなことを改めて思わせてくれる体験であり、それは新たな自分が誕生しつつあることを示唆する体験でもあった。ヴェネチア:2019/11/11(月)08:13

5177.【ヴェネチア旅行記】サン・マルコ広場のギャラリーで小松美羽さんの作品を見れた幸運～企画展“Diversity for Peace!”より

先ほどジャグジーを使いながら浴槽にゆっくりと浸かり、午前と午後の観光の疲れを癒した。今日はまた素晴らしい体験ができた日であった。

ヴェネチア滞在の三日目の今日は、ホテルを出発してしばらくすると小雨が降り始めた。幸いにも強い雨ではなかったが、折り畳み傘を差すことにした。いや、その前に言及しておかなければならないのは、ホテルの自室の窓から通りを眺めた時には浸水していないように見えたのだが、出発の時に昨日ほどではないにせよ、またしても水が浸水していたことである。

今朝もまた爪先立ちでホテルの扉を開けて外に出た。すると、やはり長靴を履いた人たちがちらほらいて、今日も浸水している場所がいくつかあるのだとすぐにわかった。やはり満潮の時間になると、この時期はどうしても運河が溢れて来ってしまうようだ。

今日はまず最初に、カナル・グランデ沿いにあるペギー・グッゲンハイム・コレクションを訪れた。この美術館で見た傑作の数々についてはまた後ほどその感想を書き留めておきたい。今日の最大のハイライトはなんと言っても、小松美羽さんの作品を無事に見れたことである。ペギー・グッゲンハイム・コレクションを後にした私は、辺りの浸水状況を見ていると、今日はサン・マルコ広場は浸水して

いないのではないかと期待した。仮に朝方に浸水があったとしても、午後のその時間にはもう水が引いているのではないかと期待したのである。そのような期待を胸に、私はカナル・グランデを架ける木造のアカデミア橋を越え、サン・マルコ広場に向かった。そして無事にサン・マルコ広場に到着した時、昨日とは異なる光景に心底安堵し、嬉しくなった。生まれて初めてサン・マルコ広場が浸水していなかったのである(昨日訪れたのが生まれて初めてであり、昨日は偶然浸水していたのだから、それは当たり前なのだが)！

私は昨日とは異なる形で童心に帰り、サン・マルコ広場の石畳の上を歩いた。一步一步を噛み締めるように石畳の上を歩いていくと、昨日見かけたようなハトがそこにいた。昨日は、水上を泳ぐハトの方が進むのが早かったが、今日は私の方が早かった。ハトもそれを認めてくれるだろう。

そして無事にギャラリーに到着すると、中に明かりが灯っており、今日は無事にギャラリーが開いていることがわかった。中に入ると、受付を担当する若い女性が椅子に座っていて、笑顔で出迎えてくれた。昨日の出来事を私から伝えると、昨日はひどい浸水のためにギャラリーを開けることができなかったとお詫びの言葉を伝えられた。私は「あれはあれで面白い出来事でしたよ」と笑顔で述べると、彼女も笑った。

彼女の話によると、サン・マルコ広場はヴェネチアの中でも一番低い場所にあるらしく、この季節はどうしても浸水が起こってしまうようだった。そのような話を聞いた後、作品が展示されている上の階に上がっていった。

今回の企画展“Diversity for Peace!”では、若い10人ほどの芸術家を取り上げられ、彼らの作品をこのギャラリーで見ることができる。小松さんの作品を見る前に、いくつか興味深い作品を見て回ることにした。そして、小松さんの作品が展示されている部屋に入った瞬間に、そこには別世界が広がっていることにすぐに気づいた。他のアーティストの作品にも独自の世界観が滲み出ている、各部屋はそれぞれに個性的だったのだが、小松さんの作品が神獣などを取り上げているためか、より一層神聖な感じが部屋に漂っていたのである。

そうした神聖さを後押しするかのよう、小松さんの作品が展示されている部屋の窓からは、ヴェネツィアのシンボルであるサン・マルコ寺院が佇んでいた。この寺院は、福音書の一つであるマルコ伝

の書記者、聖マルコの遺体が祀ってある、極めて神聖な聖堂である。私はしばらくその小窓から、サン・マルコ寺院をぼんやりと眺めていた。

すると、窓辺に一羽のハトがやって来て、部屋の中にいる私に挨拶をしてくるかのようにこちらを見ていた。いやそれはひょっとすると、私を見ていたのではなく、小松さんの作品を見ていたのかもしれない。ハトをも引きつけてしまう何かの小松さんの作品にはあった。私はそこで展示されている小松さんの一つ一つの作品を丁寧に見て、最後にこの場所に来れたことに感謝の祈りを捧げた。

小松さんの作品はどれも見応えがあり、強いエネルギーを発していたが、その中でも特に幾つかの作品を好む自分がいたのは確かである。それらの作品についてはまた明日にでも書き留めておきたい。今から少し仮眠を取り、夕食を摂った後に、今夜もまたクラシックコンサートに出かける。ヴェネチア:2019/11/11(月)18:02

5178. 【ヴェネチア旅行記】 幻想的な音による目覚めとヴェネチア滞在4日目の過ごし方

時刻はゆっくりと午前6時を迎えた。ヴェネチア滞在の4日目が静かに始まった。

今朝の起床時間は5時半であり、ここ数日間の起床よりも1時間ほど遅かったが、目覚めた時の心身の状態の良さはいつも通りである。その日が充実し、快眠を取れることほど幸せなことはないのかもしれない。

目覚めた時刻と同時に、外からクリスタルボウルのような音が鳴り始めた。それは教会の鐘の音とも異なっており、とても幻想的な響きだった。もしかすると、あれは大道芸人が、朝早く近くでガラスコップを用いて奏でていた音なのかもしれないと思った。いずれにせよ、優しさのある美しい音色だった。その音色は1分ほど奏でられた後に消えていった。

起床直後にシャワーを浴びていると、昨夜のことが思い出された。昨夜もまた様々な感動的な体験をしていたように思う。自分の内側に美的体験がゆっくりと蓄積され、それがゆっくりと自分の肥やしになっているのを実感する。

天気予報に基けば、昨日は一日中雨の予報だったが、雨が降っていない時間帯も随分とあり、非常に助かった。また、雨が降っていたとしてもそれは小降りであり、時にオランダで見るような激しい横殴りの雨ではなかった。しとしと天からヴェネチアの街に降り注ぐ雨は、大変趣き深いものがあつた。どうやら今日もまた一日中雨のようだ。窓の外に広がる世界に耳を傾けてみても、雨の音は聞こえない。どうやら今は雨が降っていないのか、降っていたとしても小雨なのだろう。

数日前に、小松美羽さんの作品を見にサン・マルコ広場のギャラリーを訪れたが、広場が浸水し切っていた光景がとても懐かしい。あの出来事は、もうすでに自分の中の思い出の一つになっている。

その日はギャラリーが急遽閉まっていたため、その代わりに本日訪れる予定だったアカデミア美術館に足を運んだ。当初の計画では、今日はその美術館だけを訪れようと思っており、そこはすでに訪問したため、今日は夜のコンサートまで自室でゆっくり過ごそうかと思う。

この数日間の間書き留めた日記や曲を編集したり、いくつかの美術館を訪れた際に購入した美術館のガイドブックなどを読み進めたい。また、今滞在している部屋には立派な画集が二冊ほどあり、それにはまだ目を通していなかったもので、今日のはのんびりと部屋でくつろぎながら、思い思いに画集を眺めたいと思う。

今夜のコンサートは、一昨日に訪れた場所で開催される。今回もまた演奏者や会場のスタッフたちがバロック時代の衣装に身を包んで私たちを出迎えてくれるそうだ。一昨日と今日は、ヴィヴァルディの曲を中心とした室内楽を聴いた。一方今日は、オペラを鑑賞する。オペラをコンサートホールで鑑賞するのは生まれて初めてのことであり、とても楽しみだ。

演奏目録としては下記の通りであり、イタリアに縁のある人物がずらりと並んでいる。このコンサートに参加した感想は、また後ほど書き留めておきたい。今日もまた、様々な感動が詰まった充実した一日になるだろう。

Baroque and Opera

前半

D. CIMAROSA - Sinfonia in re maggiore per Orchestra

W. A. MOZART - “Le Nozze di Figaro”

“Farfallone amoroso” per Baritono

G. ROSSINI - “Il Barbiere di Siviglia”

“Una voce poco fa” per Soprano

J. OFFENBACH - “I Racconti di Hoffman”

“Barcarola” per Orchestra

G. VERDI - “I Lombardi alla prima crociata”

”La mia letizia infondere” per Tenore

G. ROSSINI - “Il Barbiere di Siviglia”

“Il factotum della città” per Baritono

G. ROSSINI - “Il Barbiere di Siviglia”

“Temporale” per Orchestra

W. A. MOZART - “Don Giovanni”

後半

G. VERDI - “La Traviata”

“Preludio al primo atto” per Orchestra

G. PUCCINI “La Bohème”

”O Mimì tu più non torni” Duetto per Tenore e Baritono

G. PUCCINI “La Bohème”

”Quando men vò” per Soprano

G. PUCCINI “Tosca”

”E lucean le stelle” per Tenore

G. VERDI “La Traviata”

“Di Provenza il mar, il suol” per Baritono

G. PUCCINI “Gianni Schicchi”

”O mio babbino caro” per Soprano

G. VERDI “Rigoletto”

“La donna è mobile” per Tenore

G. VERDI “La Traviata”

ヴェネチア:2019/11/12(火)06:35

5179.【ヴェネチア旅行記】イタリアのオーガニック食品事情:「産みの苦しみ」を示唆する
今朝方の夢

今、宿泊先の近くにあるオーガニック専門店で購入した八丁味噌を食べている。フローニンゲンの自宅にいる時も、この濃厚な八丁味噌を毎朝スプーン一杯すくって食べることが一つの楽しみになっている。今口の中でゆっくりと溶かしながら食べている八丁味噌もまた美味であり、こうしたものが旅先でも食べられることに改めて感謝の念を持つ。

昨日は夕方に、街の中心部のオーガニックスーパーにも足を運んだ。そこは果物や野菜が比較的充実していたが、近所の店と同様に、イタリアのオーガニックな食材の値段は、オランダに比べて随分と高い印象を受けた。日本に比べるとそれはまだ安いと言えるのかもしれないが、日本と同様に、オーガニックなものが一般市民に広く普及するのは、イタリアにおいてもまだこれからなのだろう。随分と昔の話だが、2002年にイタリア・リラが廃止され、ユーロが導入されてから、イタリアの物価は随分と上がってしまったらしい。そのあたりの事情もあって、オーガニックなものが高くなってしまっているのかもしれないと思う。

時刻は午前6時半を過ぎた。今、今朝方に見ていた夢の断片をふと思い出した。夢の中で私は、人間の出産現場に立ち会っていた。なんと今から出産をしようとしているのは1歳の女の子であった。

まだ言葉も十分に話せないような女の子がこれから出産をするというのは信じられなかったが、周りの人たちは着実にその準備を始めていた。

出産の場所は病院ではなく、小川の脇であった。その小川の水深は低く、ほんの少し水が流れていた。出産の準備に向けて動いている人以外に、私の周りには何人もの知人がいた。およそ10名ぐらいの知人がそこにいて、彼らの関係はみんなバラバラであった。協働関係の知人、大学時代の先輩、そして小中高時代の友人など、本当にお互いに繋がりが全くないような人たちがそこにいた。

出産の準備が整ったのか、1歳の女の子が和式便所で用を足すような姿勢になり、きばり始めた。隣にいた助産婦のような女性が掛け声をかけ、応援をしているのだが、なかなか赤ちゃんが生まれてこなかった。きばれども赤ちゃんが生まれてこない状態が続けば続くほど、その女の子の疲弊が明らかになっていった。するとあるところで、何かが小川に産み落とされた音が聞こえた。見るとそれは、小さいピアノのおもちゃであった。それが女の子の体から生み落とされた時には心底驚いた。だが、周りの人たちはそれほど驚いておらず、引き続き女の子に応援の声をかけ続けている。

そこからも懸命にきばっても赤ちゃんが生まれてこない状態が続き、女の子はまさに生みの苦しみを味わっているようだった。すると、周りの大人たちが各人思い思いに話し始め、気がつけばいくつかの小さなグループができていた。端的に言えば、先ほどまでは一丸となって女の子を応援していた私たちがバラバラになってしまったのである。

私はそうした状況と、そこで醸し出されている雰囲気あまり良くないと思った。各人が勝手なことを言い出しており、收拾がつかないような状態に見かねた私は、全員を再度集めて、大きな声で一言述べた。それはその女の子から生まれてこようとしている赤ちゃんの代弁であり、「てんでバラバラなこの状況の中で、誰が生まれてくるか！全員が一つになれ！」というものだった。それを伝えた私の声は荒々しく、ほぼ怒鳴り声のようだった。

しかしそれは、私が生まれてこようとしている赤ちゃんから感じ取ったことをそっくりそのまま表現したに過ぎなかった。その何かを訴える願いにも似た声を全員が聞いたとき、その場にいた私たちはまた一つになろうとしていた。そこで夢から覚めた。この夢の場面は大変印象に残っている。新しい生

命が持つ固有の願いや想い。そして新たな生命を生み出す苦しみのようなものが象徴されていたように思えた。そして、新たな生命を生み出す時には、様々な人たちの助けが必要であり、しかもそれらはバラバラなものではなく、何か一つに結晶化される形の支援が必要なのだと思わされた。逆に言えば、何かを生み出そうとする者への支援というのは、バラバラなものではダメであり、統合的になされる必要があると言えるかもしれない。

個人的には、女の子が最初に産み落としたのがピアノのおもちゃであったことが興味深い。それは、音楽を生み出すことの苦しみを示唆しているのだろうか。一昨日、そして昨日に聴いた作曲家たちの曲は、そのような産みの苦しみを伴ったものだったのかもしれない。その他にも色々と思うところのある夢であり、それらについてはまた思いつく都度、文章を書き留めておきたい。ヴェネチア:2019/11/12(火)07:04

5180.【ヴェネチア旅行記】ヴェネチアの街から滲み出るもの:ペギー・グッゲンハイム・コレクションを訪れて

リビングルームの窓のカーテンを開けると、そこにはしとしとと小雨が降り注ぐ世界があった。幾分侘しげな灰色の空が広がっていて、ある一つの世界がそこに静かに佇んでいる。ヴェネチアの持つ硬質感は、パリやコペンハーゲンの持つものとはまた異なるように感じられる。パリやコペンハーゲンと同様に、ヴェネチアに堆積されているものの密度はほぼ同じように感じられるが、パリやコペンハーゲンのように、こちらの存在を圧縮してしまうような重々しい感じではない。

長大な歴史の風に吹かれてもなお残った、悠久さのある静かな重さがここにある。それは街という一つの生命の魂の重みと言ってもいいかもしれない。街にも魂があり、それには固有の重さがあったのだ。

今、近くの教会の鐘の音が鳴り始めた。今日は、今夜のコンサートに出かけていくまでは外に出ず、自室の中でゆったりとした時間を過ごしたい。そのための食料や飲み物は揃っている。暖かいカカオドリンクでも作って、それを片手に思い思いに時間を過ごしていく。

旅をすること、日記を書くこと、曲を作ること。それらはやはり自分の人生に与えられた役割なのだろう。旅をすることもまた本当に一つの役割だと実感している。旅によって自己が涵養され、涵養され

た自己を通じて新たな言葉や音が生み出される。創造と涵養は表裏一体の関係にある。自己を深めていく必要性と必然性が、そのあたりに見出される。

昨日、ペギー・グッゲンハイム・コレクションという美術館を訪れた際に、いくつかの素晴らしい作品を見た。ピカソやブラック、そしてバルセロナで深いつながりを持ったミロの作品なども確かに素晴らしかったが、昨日私を捉えたのは、カンディンスキー、クレー、マレーヴィチの作品だった。とりわけ、カンディンスキーの『赤い斑点のある風景 No.2』は実に見事であった。その色使いに魅了され、それはどこかシュタイナー教育における滲み絵のような幻想さを醸し出していた。クレーの『魔法の庭園』にもそうした幻想さがあった。

マレーヴィチの作品では、1916年頃に制作された無題の作品が印象に残っている。オーディオガイドの解説を聞いていると、この画家は多次元空間を愛し、超越的な世界に対する希求が強かったことを知った。その作品で描かれている空間上に浮かぶ幾何学的なモチーフは、キュビズムの影響が見られながらも、独特の世界観が現れている。それは彼が考案した、抽象性を徹底した「シュプレマティスム」の精神を体現したものだと言える。

その他にも強い印象が残っている作品は、マックス・エルンスト(1891-1976)が自身の無意識の世界から生み出したであろう悪魔的な雰囲気醸し出す『花嫁の化粧』、ジャクソン・ポロック(1912-1956)の神話的な雰囲気を喚起する『月の女性』である。ポロックは偶然にも、先日日本に一時帰国した際に購入した美術家の篠田桃紅先生のエッセイの中で言及されており、そこからひと月足らずの期間に実際にポロックの作品群を鑑賞できる機会に恵まれるとは思っても見なかった。何より、この美術館の創始者であるペギー・グッゲンハイムは、ポロックの最大の支援者の一人であり、この美術館にはポロックの多くの作品が所蔵されている。

また、篠田先生の書籍の中で言及されていた洋画家の岡田謙三氏(1902-1982)の作品もまさかこの美術館で鑑賞できるとは思ってもおらず、それは大変嬉しい出会いであった。ありきたりな表現になってしまうかもしれないが、抽象的な絵画世界の中に日本的な感性、とりわけ自然を愛でる心が作品の中に滲み出ている点に、大きな共感の念を持った。岡田氏の“I find myself in nature and nature in my self. (私は自然の中に自分自身を見出し、自分自身の中に自然を見出す)”という言葉は、まさに自分が実感していること、そして大切にしていることを言い表しており、岡田氏の思想

にも大変強い共感の念を持った。この美術館で感じられたことはその他にもたくさんあるであろうから、それらが言葉の形として現れようとし始めたら、また何か書き留めておきたい。ヴェネチア：
2019/11/12(火)07:44